

Title	Structure and Function of Membrane-Bound ATPase from <i>Methanosarcina barkeri</i>
Author(s)	稲富, 健一
Citation	大阪大学, 1990, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36786
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	いな 稲	とみ 富	けん 健	いち 一
学位の種類	工	学	博	士
学位記番号	第	8984	号	
学位授与の日付	平成2年	2月	28日	
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	Structure and Function of Membrane-Bound ATPase from <i>Methanosarcina barkeri</i> (<i>Methanosarcina barkeri</i> 膜結合ATPase の構造と機能)			
論文審査委員	(主査) 教授 二井 将光 教授 吉田 敏臣 教授 岡田 弘輔 教授 今中 忠行 教授 大嶋 泰治 教授 菅 健一 教 山田 靖宙 教授 高野 光男			

論文内容の要旨

メタン細菌は環境処理微生物として重要な役割を果たしている絶対嫌気性の独立栄養細菌であり、高度好塩菌や好熱・好酸菌とともに古細菌に分類されている。メタン細菌 *Methanosarcina barkeri* の懸濁液のpHを人工的にシフトさせることにより合成されるATPは、ATP合成酵素 (F_0F_1 -ATPase) の特異的阻害剤ジシクロヘキシルカルボジイミド (DCCD) によって阻害される。従って、*M. barkeri* 細胞膜には、ミトコンドリア、大腸菌細胞膜等と同様の F_0F_1 -ATPase が存在すると考えられていた。本研究の開始以前には、メタン細菌の膜画分に存在するATPase活性の詳細な解析、酵素の精製や構造についての研究は皆無であった。本研究では初めてメタン細菌から膜結合ATPaseを精製しそのサブユニット組成を明らかにした。さらに主要サブユニットの遺伝子をクローン化し、DNAの塩基配列を決定し、サブユニット蛋白の一次構造を推定した。加えて、メタン細菌のATPaseを他のATPaseと詳細に比較した。本論文は以上の研究をまとめたものであり、六章から成っている。

第一章では古細菌、メタン細菌、 H^+ -ATPaseについて現在までの知見をまとめた。

第二章では *M. barkeri* の膜画分に存在するATPaseの性質を検討し膜表在性部分のATPaseを精製してそのサブユニット組成を解析した。その結果、膜画分のATPase活性は F_0F_1 -ATPase と同じくDCCDで阻害されること、精製したATPaseは α (62 kDa) と β (49 kDa) の二つのサブユニットから構成されており、 F_0F_1 -ATPaseと比較して簡単な構造をもっていることが明らかになった。

第三章では界面活性剤によって膜内在性部分も含めたATPase複合体を可溶化精製した。その結果、精製酵素は α と β サブユニットに加えて 40, 27, 23, 6 kDa の蛋白を含んでおり、この中の6 kDaがDCCDを結合するサブユニットであることを同定した。

第四章では、触媒活性を持つ膜表在性部分 ($\alpha\beta$ 複合体) の α と β サブユニットをそれぞれ単離し、両サブユニット及び $\alpha\beta$ 複合体をヌクレオチド存在下にトリプシンで分解し、トリプシン感受性に対するヌクレオチドの影響を解析した。その結果、 α サブユニットにヌクレオチド結合部位が存在することが示唆された。

第五章では *M. barkeri* の遺伝子ライブラリーを作製し、 α と β サブユニットの遺伝子 (*atp A*と*atp B*) をクローン化しDNA塩基配列を決定し両サブユニットの一次構造を明らかにした。その結果、 α サブユニットには、他のヌクレオチド結合蛋白によく保存されている共通配列 (GXXXXGKT/S) が存在し、 α サブユニットに触媒部位が存在することが示唆された。さらに両サブユニットのアミノ酸配列を他のATPaseと比較した結果、メタン細菌のATPaseは F_0F_1 -ATPaseよりむしろ真核生物の液胞膜ATPaseと類似した構造を持つことが明らかになった。

第六章ではメタン細菌ATPaseの性質や構造を他のATPaseと比較し、 H^+ を輸送するATPaseの進化について考察した。その結果メタン細菌ATPase、液胞膜ATPase及び F_0F_1 -ATPaseが共通の祖先蛋白から進化してきたことが示唆された。これらの結果をもとに H^+ -ATPaseの進化系統樹を提案した。

論文の審査結果の要旨

本論文は、古細菌に分類されているメタン細菌 *Methanosarcina barkeri* のATP合成酵素(ATPase)について系統的に研究を行ったものであり、メタン細菌の遺伝子工学的研究の先鞭をつけたものである。主な成果を要約すると以下のとおりである。

- (1) *M. barkeri* の細胞膜に存在するATPaseの性質を検討した後、膜表在性部分を精製し、 α と β の2種のサブユニットからなること、 α サブユニットにヌクレオチド結合部位があることを明らかにしている。
- (2) *M. barkeri* の細胞膜より、膜内在性部分をもつATPase複合体を可溶化、精製している。これにより膜内在性サブユニットを明らかにしている。
- (3) *M. barkeri* の遺伝子ライブラリーを作製し、 α と β サブユニットの遺伝子をクローン化し、全塩基配列を決定し、両サブユニットの一次構造を明らかにしている。その結果、*M. barkeri* ATPaseは真核細胞液胞膜ATPaseによく似ていることを示している。さらに、ATPaseの進化に対し有力な仮説を提出している。

以上の成果は、メタン細菌のエネルギー転換機構についての重要な発見であり、この菌の進化とATPaseの起源に対して全く新しい考え方を示したものである。環境処理微生物として重要な細菌であるメタン細菌におけるこの発見は、先駆性の高いものである。したがって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。